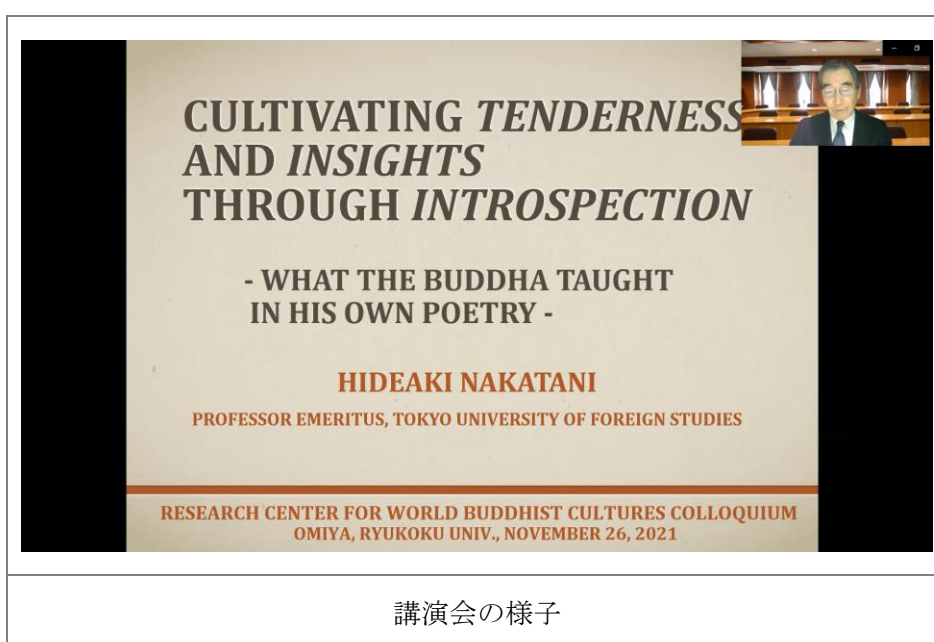

❖ 講演会・研究セミナー ❖

コロキウム

Cultivating Tenderness and Insights through Introspection What the Buddha Taught in His Own Poetry

2021 年 11 月 26 日 (金) 13:00～14:30

龍谷大学大宮学舎西翼 2 階大会議室/オンライン開催 (Zoom)



講演会の様子

❖ 概 要 ❖

2021 年 11 月 26 日、龍谷大学世界仏教文化研究センターのコロキアムが開催された。本コロキアムは同センター所属研究者の研究成果を英語で発信する場であり、同センターが国際的な学術交流を促進するプラットフォームとしての役割を果たすことを目的としたものである。第一回目となる中谷英明氏（龍谷大学世界仏教文化研究センター研究員、東京外国語大学名誉教授）による発表では、「Cultivating Tenderness and Insights Through Introspection - What the Buddha Taught in His Own Poetry」という題目の下、パーリ語經典の言語学的分析が行われた。

講 演 者：中谷 英明 氏（龍谷大学世界仏教文化研究センター 客員研究員）



中谷 氏

釈迦による仏教創設以降、仏教がアジア各地に広まる中で、数多くの經典が編纂・編集・翻訳されてきた。最古の現存經典の一つとされる『ダンマパダ』は様々な宗派で編纂・引用されてきたが、それぞれの『ダンマパダ』を比較すれば、パーリ語仏典にはとりわけ古い構造が維持されていることが分かるという。本発表では、『ダンマパダ』と同じく現存最

古の仏典とされる『スッタニパータ』に焦点があてられた。『スッタニパータ』は全 5 章からなる。そのうちの第 4 章と 5 章は特に古いものであり、これらの章についてはその注釈部も経典として扱われるという他にはない特徴がみられるという。中谷氏は、第 4 章の「アッタカ・ヴァッカ」に注目し、韻律、形態、語彙等の点において、この章が他の仏典とは一線を画す最古の文献の一つであることを示した。

中谷氏はまず、「アッタカ・ヴァッカ」というタイトルに注目した。パーリ語「アッタカ」はサンスクリット語の「arthaka」あるいは「astaka」からきていると考えられ、後世の訳もこのうちのどちらかを採用している。しかし、サンスクリット語の意味を考えると、「arthaka」を語源とする語が章のタイトルとなるのは不自然であるという。

一方、「astaka」については、氏は古代インド聖典『リグ・ヴェーダ』の構成方法との関わりを指摘した。「astaka」と呼ばれる構成方法においては、8 つの章が一つのまとまりとして扱われる。「アッタカ・ヴァッカ」の構成もこれとよく似ているという。各項の多くは 8 つの韻文で構成されており、項の数も 8 の倍数の 16 となっている。8 の法則に則っていない部分の多くには後世に韻文が書き加えられた痕跡が認められるという。このことから、「アッタカ・ヴァッカ」というタイトルは「八つ一組」を意味する語「astaka」からきていると考えられ、この語をタイトルに冠する習慣はブラーフマナ時代（およそ紀元前 900 年から紀元前 500 年）にまで遡れるという。そして氏によれば、このような古代インドの構成を持つパーリ語文献は「アッタカ・ヴァッカ」の他にはない。

多数の韻文で構成される古代インド文献の成立年代を特定するにあたり、韻律は重要な手がかりとなる。中谷氏は『リグ・ヴェーダ』の韻律がどのように展開したのかを分析し、特定の音律が時代を追うごとに減少していき、後世のパーリ文献ではやがて見られなくなることを指摘した。「アッタカ・ヴァッカ」においてはその音律が他のパーリ語仏典と比しても多く維持されており、これも「アッタカ・ヴァッカ」の成立年代が古いことを示しているという。

さらに、中谷氏によると、パーリ語経典は成立年代が異なる 3 つのグループに分けられるといい、それぞれのグループでは単語の使われ方が異なるという。例えば、「sacca（真実）」は最古のものに分類される経典においては否定的な文脈で多用されるが、それ以外の経典では肯定的な文脈で使用される。また、「suddha（純）」という語についても同じ傾向がみられるという。「アッタカ・ヴァッカ」でもこのような用法が採用されており、そのため最古のグループに分類することができるという。

発表の後に設けられた質疑応答では、「アッタカ・ヴァッカ」中で語られる「決して到達



することはできないが到達すべき状態」を真宗の悪人正機思想と関連付けた点が興味深かった、発表タイトルでは「poetry」という語が使われているが、釈迦が教えを説くときに実際に韻文が使われることはあったのか、といったコメントが寄せられた。



会場の様子